

モデル事業名	むらを学ぶ「むらの教科書づくり」事業 わがらで地域づくりプログラム
活動団体名	色川百姓養成塾
ホームページ	http://www.zb.ztv.ne.jp/hyakusho/index.htm
所属／ 担当者名	事務局 春原麻子（すのはらあさこ）
連絡先	Tel:0735-56-0130 E-mail: hyakusho@zb.ztv.ne.jp
活動地域	和歌山県那智勝浦町 色川地区

● 活動地域の概要

【色川地区】…那智勝浦町の山間部9集落の総称

- ・江戸時代までの千年間は、各集落がそれぞれ独立した村だった
- ・明治22年～昭和30年の66年間は「色川村」だった
- ・人口・世帯数、年齢別人口構成等：図および表参照

※1977年より移住者を受け入れ始め、現在では移住者が
色川地区全体のおよそ1/3、60世帯160人にのぼる

- ・高齢化率・平均年齢：移住者の少ない集落で高く、直柱（1軒1人のみ）に続き、小阪が高い
- ・公共交通：JR紀伊勝浦駅から町営バスで約1時間（1日3便）

【色川地区の集落別人口表（2007年現在）】

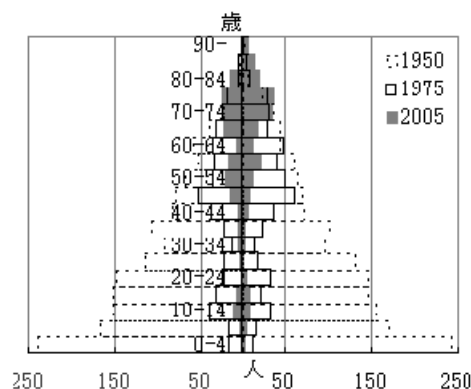
		人口			世帯数			平均年齢	高齢化率
			移住者(%)			移住者(%)			
東部	南平野	56	10	18	34	5	15	63	54
	小阪	51	1	2	31	1	3	72	78
中部	口色川	130	61	47	66	21	32	52	36
	大野	114	53	46	55	18	33	54	46
	熊瀬川	19	2	11	12	1	8	66	63
西部	田垣内	65	17	26	32	8	25	53	48
	坂足	11	5	45	5	1	20	54	46
	極原	10	6	60	5	2	40	43	30
	直柱	1	0	0	1	0	0	72	100



【位置図】



【耕作放棄された棚田（小阪集落）】



【色川の年齢別人口構成の変遷】

- ・産業・雇用：主産業は林業・茶業だが、いずれも停滞。小規模事業体（商店、食品加工場など）もあるが、色川地区内における雇用機会は概して少なく、那智勝浦町内の中心部または隣の新宮市へ通勤するケースが多い。
- ・学校：保育所・小・中学校が各1校ずつ。現在、1学年は概ね1～5名で、移住者の子どもがほとんど。高校は新宮市または串本町へ通学し、大学進学を機に色川を離れ、そのまま都会で就職するケースが多い。

● 活動地域の課題

- ・移住者が多く、地域づくりに向けた活動が活発に行われている一方で、地元住民の高齢化が進行している。地元住民からの理解・協力が薄い、移住者中心の地域づくりとなりがちである。表面上は活気づいているようでも、⇒地元住民の自信と誇りとを掻き立て、地元住民が主役となった、地域の歴史・文化を大事にする地域づくりを進める必要がある。
- ・多様な地域づくり活動が同時並行で進んでいるが、それぞれ独立して動いており、相互の連携は十分とはいえない。⇒各活動の連携を進め、一体的に地域の自治をめざす体制づくりの必要がある。
- ・本来、色川のような小さな地区だけが周辺地域から切り離して活性化できるはずはなく、より広域で地域づくりを考えねばならない。しかし、色川地区の移住者受け入れをはじめとする地域振興のとりくみの経験・蓄積が、那智勝浦町内および近隣市町村の他地区と共有できておらず、色川が「一人勝ちの先進地」と捉えられてしまう雰囲気がある。⇒地域振興について、周辺の他地区と情報共有し、広域で協力して地域づくりを進めていく体制を模索する必要がある。

● 活動の内容

・平成20年度（「むらの教科書づくり」として、色川地区内小阪集落にて実施）

目標：都会育ちの若者と、田舎の集落を担ってきたお年寄りとの出会い、「むら」にこそ色濃く残る日本の原点をとみに掘り起こし、次に受け継いでいく流れを目指す。

方法：都会の大学生（公募）が集落に短期滞在し、むらで昔から営まれ受け継がれてきたくらしについて聞き取り調査を実施。調査内容を取りまとめた冊子「むらの教科書」を学生主体で作成。

活動普及のため、学生主体による成果報告会を開催（3月6日東京、13日和歌山県田辺市、29日小阪）。

・平成21年度

目標：集落外の若者の力を活用した、住民主体の地域づくり拠点「集落支援センター（仮）」設置にむけた組織づくり。外部の若者を巻き込み地域づくりの人材として育成するとともに、住民の自治意識を高めることを目指す。

方法：学生による地域調査…若者を地域に呼び込むきっかけとして、前年度の反省を活かしつつ継続する。

地区内連携の強化…集落支援員を核に、学生と地域住民の連携を図り、センター設置にむけた組織づくりに着手。

地区間連携の検討…活動波及、およびより普遍的持続的なしくみ作りにむけた近隣他地区との連携に挑戦する。

● 活動の成果

・平成20年度

聞き取り調査を契機に、大学生11名が集落に平均1週間滞在し、小阪住民と交流をもった。調査はもとより、教科書作成・報告会実施のための作業を通じて、学生の自主性・積極性の高揚がみられた。学生からの刺激を受け、小阪集落内においても青年団の再結成にみられるような活気高揚がみられた。

一方で、以下のような課題が浮かび上がった。

- ・なるべく長期で滞在し、お年寄りの話をより深く理解するための生活体験を取り入れること
- ・聞き取り調査をより充実させるため、調査手法の事前講習や調査テーマの設定を行うこと
- ・昔話を掘り起こし交流を図るだけでなく、現実として集落をこれからどうしていくかを考えること
- ・一過性の事業で終わらせず、長く継続させること
- ・小阪集落内の活動にとどめず、他地域へ波及させる具体的な手立てを考えること



【聞き取り調査の様子】

・平成21年度

長期滞在の学生を核として、短期滞在の学生を受け入れた。

→多くの学生に、むらの持つ価値を垣間見てもらえたと同時に、コーディネータ役を果たす長期滞在学生の著しい成長がみられた。

住民自治にむけた組織づくりは、集落支援員を核として進行中である。

他地区との連携（今年度は、新宮市（旧熊野川町）小口地区および古座川町西川集落）のため、学生や住民が行き来する機会を設けることにより、行政職員および集落住民とのつながりが生まれている。

昨年度から事業にかかわる人々の主体的な取り組みも始まっている。

昨年度参加の学生により、色川製品のブランド化に向けた取り組み（写真参照）

学生受け入れに協力をいただいている地元住民主催によるワークショップの開催 等



【和歌山大学園祭にて
学生が色川産品をPR】

● 今後の課題及び展望

・課題

1年半の当事業のとりくみを通じて、以下のことが確認できた。

- ・存続の危機に瀕した集落の再生には、住民の自治意識高揚こそがカギであること
 - ・そのためには、住民自身が集落のくらし・自らの人生の価値を再評価し、誇りを持ち直し、人と人とのつながりの大切さを再確認することが欠かせないこと
 - ・集落外の若者が、今までの流れに目を向け敬意を払いつつ集落に出入りすることは、そのきっかけとなりうること
- 学生といえどもそれぞれに忙しく、関心はあっても遠隔地まで足を運び滞在する時間をとるのが難しい場合も多い。長期滞在の若者を核として短期滞在の若者を受け入れるという態勢は現実的かつ効果的であり、当事業のようなとりくみの普及にあたっては、長期滞在しその任にあたる若者をいかに確保・育成・配置していくかが課題となる。

・展望

地元住民の誇りを取り戻し、住民間のつながりの大切さを再確認し、地区全体で自治意識を高揚するため、より効果的な方法を引き続き検討する。

集落支援員、その他色川に長期・短期で滞在する若者との協力体制づくりに、引き続き取り組む。

色川地区内のとりくみの成果を近隣他地区と共有する体制づくりに、引き続き取り組む。